

老子直解 下篇

第三十八章 上徳不徳

上徳は徳とせず、これを以て徳あり。(上徳、古代の君子)

下徳は徳をうしなわざらんとす、これを以て徳なし。(下徳、後代の君子)

上徳はなすことなくして、しかもなさざる無し。

下徳はこれをなして、しかも以てなすこと無し。

上仁はこれをなして、しかも以てなすこと無し。(上仁は古代の仁人)

上義はこれをなして、しかも以てなすことあり。(上義は古代の正しい人)

上礼はこれをなして、しかもこれに應ずることなければ、(上礼、古代の礼儀の厚かった人)

すなわち臂(かた)をかか(か)けて(肩を払い)、これをひく(暴力で引っぱる)、故に道を失つてのちに徳あり。

徳を失つて後に仁あり。仁を失つてのちの義あり。(仁、人としての道、人道)

義を失つて後に礼あり。それ礼は忠信の薄にして乱のはじめなり。

前識者(先に知識を得た者)は道の華にして、しかして愚の始なり。

これをもって大丈夫(大勇士)はその厚きにおいてその薄きにおらず。(信念が厚くて忠実。薄き、礼儀がうすい)

その実において、その華におらず(実におる、結果にとどまる)、故に彼を去りこれを取るなり。(彼を去って、礼をすてて。これを取る、道に向う)

〔訳者註〕

作為的道徳主義者の信条本位の偽善に反対する強い抗議である。道は無為でも万事万物の源泉であって、常に働いている。上篇が「道」の字から始まり、この下篇の「徳」の字と続けて「道徳経」と呼ぶわけである。博愛と正義と礼儀を包含する上徳は古代の徳の極であった。理想社会、ユートピアが古代にあったと考える中国思想に対し西洋思想はユートピアは未来社会と考える。無為をなしてその徳を忘れるのが上徳である。下徳は後代の人為的の徳だから広く世に行われているが、それから分れて仁・義・礼などが出た。仁は報酬を求めない愛である。礼は人間相互の人為による行動である。この三つの内一つでも対応しなかったら徳は成立しない。礼は結局、長上に媚びた偽善で道には遠いものである。

第三十九章 昔之得一

始めこれは一を得たるものなり、天は一を得て以て清く（天は静かに統一していると清明である）地は一を得て以てやすく、神は一を得て以て霊となり（一は道・統一・団結）（鬼も神も道を得なければ神秘力はない）

谷は一を得て以て盈ち（道あって子をはらむ）、万物は一を得て以て生じ、

王侯は一を得て以て天下の正となる（天下の正、世の模範）

そのこれを致すは一なり。天きよきを以てすることなければ、はた恐らく裂けん。

地やすきを以てすることなければはた恐らく発せん（爆発する）

神は霊をもつてすることなければはた恐らくやまん（休止する）

谷みつるを以てすることなければはた恐らくつきん。

万物生ずるを以てすることなければはた恐らく滅せん。

侯王ただしきを以てすること無く、しかも貴高ならばはた恐らくはたおれん。（王侯は正しからず、高ぶっていたらたおれるだろう）

故に貴は賤を以て基となし、高きはひくきを以て基となすなり。これを以て侯王は自ら孤寡（やもめ、やもを）、不穀（こく）という。（足らない者、貧乏を謙遜して王侯が賤民のように自称する）

それその賤を以て本となすか、非（あらず）や。

故に車を数うることを致せば車なし、（分解すると車はなくなる）
ろくろく（みがいた玉）としての玉の如く、珞珞（ごろごろして）石のごとくなるを以てせず。

〔訳者註〕

調和した平和な一致がなければ、天はさけ、地は爆発して人間は亡びるとの警告が出ている。権力者と国家の對抗の予告であり、無価値な権力の分析である。この文の車の寓話は大槩若経にもある。

第四十章 反者道之

反は道の動にして弱は道の用なり。（反は報復、反始、還元。動は道、動により万物が生じる）
天地万物は有より生じ、有は無より生ず。

〔訳者註〕

道は力では働かない。有は無との相関的な対照として起る。仏教の禅の哲学的直観による心の安定の祖述である。

第四十一章 下士聞道

上士は道を聞けば、つとめてこれをおこなう。(上士は昔の君子、もののふ)
中士は道を聞けば存するがごとく亡(ぼ)うするがごとし。(半信半疑)
下士は道を聞けばこれを大いに疑う。(下士、俗物)

故に建言にこれあり(建言は道を論じた古書名)、「明道はくらきがごとく、
進道は退くがごとく、夷(い)道(平な道)はるい(糸のふし)のごとく、
上徳は谷のごとく(谷、清濁合せ呑む空虚)、太白(極く純白)は辱(よごれ)のごとく、
広徳は足らざるがごとく、建徳(徳をたてること)はおこたれるがごとく(おこたれるは、怠る)、
質直はかわるがごとく(質貞とせる異本あり。四季の順序)、大方は隅なく(大きな四角はすみ
がないように見える)、

大器は晩成し(大器、有能な人は老人になってできる)、大音は希聲(きせい)にして、大象は
無形なり」と。道はかくれて名なし。

それただ道は善くしばらく貸して成すなり。(且く貸す、ちよっとの間待つ)

〔訳者註〕

道と徳との区分の具体的説明であって、上記のように寛大な謙遜の態度を範とする。

第四十二章 道生一

道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ(道は無限、無極)三は万物を生ず。万物は陰をお
い、陽をいだく。冲氣を以て和することなす。

人のにくむ所はただ孤寡不穀のみ。(冲氣は中立性、中性子にあたる。孤寡不穀は孤児とやもめ
と貧乏)しかして王公は以て称となす。(三九章参照)

故に物あるいはこれを損じて益し、或はこれを益して損(そん)ずるなり。(謙遜する者は尊敬
され、尊大な者は卑しめられる)

人の教うるところは我もまたこれを教う(古人の教えに私も異存はない)

強梁(きょうりょう)なるもの(強情残忍な者)はその死を得ず。

吾はまさに以て教えの父となさん。

〔訳者註〕

老子は原子論でも東洋の祖述者である。かれはその見解から人間生活の基本を引出し
た。冲氣は中性子に当たり、陰陽はプロトンとエレクトロンに当たる。

第四十三章 天下之至柔

天下の至柔（最もやわらかいもの）は天下の至堅（最も堅いもの）を馳騁（ちてい）し（狩りたてる）

無有（無の存在）は無間（すきまのないところ）に入る。

われこれを以て無為の益あるを知るなり。

不言の教と無為の益とは天下これにおよぶことなし矣。

〔訳者註〕

非ユークリッド幾何学の第四次元である。超三次元の示唆は老子の哲学だけの持つ唯一の応用である。老子はかれの主張が世界を指向させると信じたのであろう。

第四十四章 名与身

名と身とはいづれか親しきぞ。身とたからとはいづれか多なるぞ。（多はまさる）

得と亡はいづれか病（へい、なやみ）なるぞ。

甚だ愛すれば必ず大いについえ、多く藏すれば厚くうしなう。足ることを知れば辱かしめられず。

止まることを知れば危うからず。以て長久たるべし。（三十三章参照）

〔訳者註〕

日常生活の金言として古今不磨。

第四十五章 大成如缺

大成は缺けたるがときも、その用は敝ならず（敝、失敗）

大盈（だいえい）は冲（むな）しきがときも、その用は窮（きわま）らず。

大直は屈せるがごとく、大巧は拙（せつ）なるがごとく、大辯は訥（とつ）なるがごとく、

躁（そう）は寒（かん）にかち、静は熱にかつても清静は天下の正（せい）たり。（清静、精神的安定。天下の正、世界の模範）

〔訳者註〕

心の安定が社会の模範でありたい。それが老子の無作為の静寂である。（四〇章参照）
動けば温かくなり、静座すれば暑熱も感じない。

第四十六章 天下有道

天下に道あれば走馬をしりぞけて以て糞するも（走馬、軍馬。糞する、田を耕す）
天下に道なければじゅ馬（じゅ馬、軍馬の仔）は郊に生ぜん（都会の近くで生まれる）
罪は欲すべきより大なるはなく、禍は足ることを知らざるよりも大なるはなく、とがは得んと欲
すよりも大なるはなし。故に足ることを知りて、これ足るは常に足るなり。

〔訳者註〕

老子の反軍主義の人間の貪欲に反する主張から出ている。（三三、四四章参照）

第四十七章 不出戸

戸より出でざるも天下を知り、まどよりうかがわざるも天道を見る。（小さい目のことに気をとられると全体が分らなくなる）

その出ずることいよいよ遠ければ、その知ることいよいよ少なし。

これを以て聖人は行かずして知り、
見ずして名（あきらか）なり、なさずして成すなり。

〔訳者註〕

理想的な無為の遂行は道の自然の道理と人間感情の交渉に由来するものである。

第四十八章 為学日益

学を為（お）さむれば日に益し、道をおさむれば日に損す、損して又これを損し、
以てなすなきに至る。なすなくしてしかもなさざるなきなり、矣。

故に天下を取るには常に事なきを以てす。（天下を取る、とは理想で世界に影響を与える）
事あるに及べば以て天下を取るに足らざるなり。（無為を根本としないと、無理な人為で失敗することが多くなる）

〔訳者註〕

無為をなすとは重大なことを起こすのではなく、世界が平和におさまっていることである。

第四十九章 聖人無常心

聖人は常の心なく、百姓の心を以て心となす。(百姓、人民)
善なるものは我これを善とし、不善なる者も我はまた善とす。

徳善なればなり、矣。(道を体得した者は公平無私で万民の父として赤児のように愛撫する)
信なるものは我これを信とし、不信なる者も我またこれを信とす、
徳信なればなり、矣。

聖人の天下に在るやちようちようとして天下のためにその心を渾(こん)にす。(ちようちようとして、一心に。渾にす、公平にする)

百姓はみなその耳目をそそぐ、聖人はみなこれを孩(がい)にす。(がい、子供のようにする)

〔訳者註〕

人の心は善悪では断定できない。老子は無心の無為によって化(進化)せしめたいと云う。

第五十章 出生入死

生を出づれば死に入るなり、生の徒は十有三あり。死の徒は十有三あり。

民の生きんとしてややもすれば死地にゆくもの十有三あり。(十有三、十人の中に三人はある)

けだし聞く(聞くところでは)、よく生を撰する者(命を大切にする者)は陸行するもじ虎(じ虎、犀や虎のような野獣)にあわず。

軍に入るも、甲兵を避けず(兵器で傷かない)、

じ(犀)はその角を投ずることなく、虎はその爪をおくところなく、

兵はそのやいばをいるる所なきなり。

それ何の故ぞ、その死地なきを以てなり、矣。

〔訳者註〕

生と死は相対的運命の一線上の二つの現象であるから、これは無暴力の抵抗の信念と執着の価値の強調である。

第五十一章 道生之

道はこれを生じ、徳はこれを畜（やしな）い、物はこれを形（けい）し、勢はこれを成（な）すなり。（物、物質が形づくり、勢、エネルギーが動かして大成させる）

これを以て万物は道をたつとび、徳をたつとびざるはなきなり。（道と徳が宇宙の根本である）道のたつときと徳のたつときと、それこれを爵（しゃく）する（位をささずける）ことなくして、しかも常におのづから然るなり。（自然の作用である）

故に道はこれを生じ、徳はこれを畜（やしな）い

これを長じ、これを育（いく）し、これをなし、これを熟（じく）し、これをおおうなり。

生ずるもの有せず、なすものたのまず。（十章参照）

長ずるも宰せず（主長とならず）、これを玄德（最高の徳）という。

〔訳者註〕

自然の道と徳とは常に無権力か又は強制で働くのだが、宇宙万物は下手な人為以外はみな順調に進んでいる。

第五十二章 天下有始

天下に始めありて以て天下の母たり。（道は天下の母）

すでにその母を得て以てその子を知り、

復してその母を守らば身を投ずるもあやうからざるなり。

その兌（たい）をふさぎ、その門を閉づれば身を終るともつかれず。（兌、口。門、行為）（五

十六章参照）

そのたいを開きその事をなさば（事がすんだら）、身を終るとも救われざるなり。（無為静寂の

心を常とすれば道にたち戻れる）

小をみるを明（めい）（明は光明、智慧）、柔を守るを強（きやう）という。（三十六章参照）

その光を用うるもその明に復帰すれば身にわざわいをのこすことなし。

これを襲常（しよくじやう）という。（襲常は伝統の無限、心の中の常態）

〔訳者註〕

心の中で認識の光が先づ動き、次に智性の本体を見出す。心の常態を保つことが光明となって道を照らす。